

観点別評価の結果を検証し、 課題をより明確にして、指導改善を図る

研究授業などを通じて全教科で試行錯誤しながら、観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）を実践している広島県立神辺旭高校。観点別評価によって、課題をより具体的に把握し、指導計画や問題作成の方針などの指導改善を進めている。

同校の新教育課程と その編成に向けた取り組み

本誌4月号・特集 P.16～19 を
ご覧ください。



同校の授業改善の取り組み

本誌8月号・特集 P.19～24 を
ご覧ください。マスタールー
ブリックも掲載しています。



学習評価の全体の方針

- 育成を目指す5つの資質・能力（*1）のマスタールーブリック（本誌8月号 P.19 に掲載）を基に、各教科が単元ごとのルーブリックを作成。5つの資質・能力と観点別評価の3観点をひもづけ、3観点をどのように評価するか、評価計画を盛り込んだ単元計画を各教科で立案し、目標・指導・評価の一体化を図る。
- 評価材料は、単元ごとの目標の到達度の検証に用いる。1学期の結果を踏まえて2学期の単元計画を変更したり、生徒への助言に活用したりする。
- パフォーマンス課題を積極的に実施し、評価材料とする。

観点別評価を評定に総括する方針

- 観点別評価を評定に総括する際には、定期考査や小テストなど、その観点の点数及びルーブリックによる評価の点数を合算する。なお、ルーブリックによる評価では、「A A」「A」「B」「C」「C C」の5段階とし、さらに点数化する。そして、100点満点に換算した数値に対して、A・B・Cをつける。
- 最終的な5段階評価は、「知識・技能」「思考・表現・判断」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点を100点満点換算したものを、2：2：1（全教科共通）の比率で合計し、その数値を基に5段階で評定をつける。

●指導・学習改善につなげる仕組み 単元計画に3観点を明記し、 観点別に課題を把握

広島県立神辺旭高校は、育成を目指す5つの資質・能力を設定し、その目標の達成に向けて指導改善を図っている。改善のツールとしているのが、各資質・能力を発揮した時の生徒の姿を4段階で記述したマスタールーブリックだ。そ

のマスタールーブリックと照らし合わせながら、単元のねらいとそれを達成するための指導計画、観点別の目標を盛り込んだ単元計画を、教科・科目ごとに作成する。そして、それを基に授業を行い、授業後、目標の到達度を観点別に検証して課題を把握し、指導計画を見直したり、生徒の助言に生かしたりしている。カリマネプロジェクト会議推進リーダーの上村



上村 純
うえむら・じゅん
教職歴8年。同校に赴任して4年目。英語科。



西村 由
にしむら・ゆう
教育情報部主任
教職歴21年。同校に赴任して5年目。理科。



梅村 嘉雄
うめむら・よしお
教務主任
教職歴35年。同校に赴任して3年目。理科。



小野 塚慎一郎
おのづか・しんいちろう
主幹教諭
教職歴21年。同校に赴任して1年目。地理歴史・公民科。

*1 「知識・技能」「協働的課題解決力」「思考力・判断力」「表現力」「主体性」の5つ。

理科

生物基礎

定期考査の振り返りを、生徒が自身の学習を見直す機会に

1学年の「生物基礎」では、生徒の提出物を「主体的に学習に取り組む態度」の評価材料としている。以前は、問題集の中の定期考査の出題範囲に該当する問題を宿題として課し、提出状況を評価していたが、現在は、授業プリントの書き込みや授業・単元ごとの振り返り、定期考査の振り返りと次の目標、その達成状況を記入したポートフォリオなどを評価材料としている。授業の振り返りでは、授業内容をきちんと理解しているか、定期考査の振り返りでは、振り返りが学習改善につながっているかに着目し、その記述を評価。振り返りをしても点数が伸びなかった場合や、学習に生かせるような振り返りができていない場合には、学習方法や学習計画についての助言をポートフォリオに記入することもある。

「振り返りと学習改善が定期考査の結果につながったといった成功体験が得られれば、さらに学習方法を工夫してみようとするなど、学習意欲の向上につながるのではないかと期待しています。目標は、進路選択にも生きるような主体性を育むことです。そうした評価のあり方を、教科の枠を超えて追究していきます」(梅村先生)

地理歴史・公民科

歴史総合

パフォーマンス課題の作成を通じて、指導力が向上

体育科1学年の「歴史総合」では、単元末に「思考・判断・表現」を測るパフォーマンス課題を出し、生徒個々の達成度を、教師がルーブリックを用いて評価している。時代背景や地域が異なる複合的なテーマについて、歴史用語を用いて説明する課題で、生徒は授業中に取り組み、提出する。学習内容を統合して考える課題を難解と感じたのか、最初、生徒はあまり熱心に取り組んでいなかった。そこで教師は、ルーブリックで1つ上の基準の評価を獲得できる方法などを示し、提出した課題の取り組み状況に対しても適宜フィードバックするようにした。すると、2学期に入って、課題の意図を把握できているとかがえる解答が増えた。

「単元末に行う学習評価では、『思考・判断・表現』の評価が『A』となる生徒が増えています。そうした生徒の成長をしっかりと見取り、思考力や判断力を発揮して取り組む課題を設定できるよう、学習評価を活用した指導改善に燃えています。生徒の状況を見計らって課題を出すなど、生徒の次の学習につながる単元計画を、より丁寧に考えるようになりました」(小野塚先生)

純生先生は、次のように語る。「評価結果を観点別に見通したところ、他の観点に比べて、『思考・判断・表現』が芳しくない生徒が多いことに気づき、英語科として重視する表現力を向上させようと、授業を見直しました。観点別

に見取る重要性を実感しました」また、各教科とも、パフォーマンス課題を積極的に実施し、「思考・判断・表現」や「主体的に学習に取り組む態度」の評価材料としている。パフォーマンス課題の実施は、生徒の学習意欲の向上に

図 指導共有授業シート(3学年・化学)

| 単元名 | 学習のまとめ、化学と人間生活 | | | |
|-------------------------------------|--|--------------------------------|---|--|
| 本校の育てたい生徒像 (教科科目全体でどの部分を強く育てたいか) | (1) 目の前の課題を自分ごととして理解し、 ^① 履えた知識や技能を活かしながら、 ^② 筋道立ててものごとを考え、 ^③ 他者と対話を繰り返すことで、よりよい解決策を導き出すことができる生徒。 (2) 多くの人とともに生きる自分であることを理解し、他者のことを考え、責任感を持って行動することのできる生徒。 | | | |
| 本時でのつきたい力 | 協働的に課題を解決する力、(アフター課題で、主体的に学習を進めていく力) | | | |
| 単元内の3観点 (本時ではどの観点に力を入れているか☆を記入) | 《知識・技能》() ・与えられた資料を知識とつなぎ合わせて理解できる 《思考・判断・表現》(☆) ・資料を基に、論理的に思考・表現できる ・議論しながら、協働的に思考活動できる 《主体的に学習に取り組む態度》() ・興味関心や自己実現に向けて、主体的に学習できる | | | |
| 本時の評価基準 | アンケートで、 ・エキスパート課題を理解し、ジグソー活動で理解を深めることができたか ・グループで、論理的に答えを導くために思考したり、議論できたか 事後の課題提出で、 ・興味関心や自己実現に向けて、主体的に課題を選択し、取り組みたかを評価する。 | | | |
| 見どころ 工夫点 | 知識や理解度、教科・科目毎のモチベーションに差が出ている集団に対して、知識構成型ジグソー法で、協働的に活動させ、3観点とも評価可能な授業設計の提案をしたい。 | | | |
| 指導過程 | 時間 | 学習活動 | 指導 | 指導上の留意点(3観点評価) |
| | 5 | 導入 | 各自の課題に責任をもって取り組ませる。 | 基本は生徒の活動を見守りながら、ファシリテートする |
| | ★35 | 展開 エキスパート活動 ジグソー活動 課題 | 組んで、資料を把握し、各問に答える。グループで内容を確認させる。 各資料を他のメンバーに解説させる。 得られた知識をもとに、グループの課題の答えを議論させる。ロイノートで提出させる。 | 理解度の低いグループへ支援する。(※)協働的な思考活動がうまくいかないグループへ支援する。(※) |
| 10 | まとめ | 全体共有 まとめ | 他グループの考えを知り、様々な思考のプロセスがあることを確認させる。 アンケートへの回答と併せてアフター課題に取り組むことを指示する。 | |

※学校資料をそのまま掲載。

「本校の育てたい生徒像」を常に意識できるよう明記

「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点のうち、力を入れて指導する観点に☆をつける

評価材料と評価基準を、簡条書きで明記

3観点それぞれの指導上の留意点を明記

「指導共有授業シート」は、公開研究授業で配布するもので、教師間で指導計画を共有する資料の1つだ。2021年度の書式から、3観点でどのように指導し、評価するのかを明記する形に改善した。

理科

化学

生徒が取り組みたくなる課題のテーマと出し方を工夫

3学年の「化学」では、新学習指導要領の趣旨を踏まえて、「主体的に学習に取り組む態度」を評価し、生徒の学習改善を図っている。その方法は、授業で取り組んだパフォーマンス課題等に関連する複数の「アフター課題」を、家庭学習の課題として提示するというもの。例えば、潜水病について知識構成型ジグソー法^{*2}で学んだ授業では、「エキスパート課題をよく理解できなかったから、気体の溶解度を復習する」「看護・医療系を目指しているから、潜水病への対処法を調べてまとめる」など、生徒は、自身の理解度や興味・関心、希望進路に合わせて課題を選んで取り組み、提出した。

「問題演習を一律に宿題とすると、解答を写して提出する生徒が多くいました。そこで、自分が学びたいこと、学習すべきことを考えて選んで課題に取り組み、それが評価される機会があれば、意欲的に自学できるのではないかと考え、『アフター課題』を取り入れました。すると、提出率も記述内容も期待以上で、『主体的に学習に取り組む態度』を育成し、学習改善につながる取り組みとして、手応えを感じています」(西村先生)

英語科

英語コミュニケーションI

生徒の変容を可視化するための仕組みを模索

英語科では、定期考査などで、設問ごとに3観点を示し、生徒に3観点を意識させるとともに、その解答状況を学習評価の材料としている。22年度の1学年では、1学期末に各観点の評価結果を確認したところ、「思考・判断・表現」は他の観点よりもAがつく生徒が少なかった。知識の暗記は得意だが、アウトプットが苦手な生徒が多いことが浮き彫りになった。そこで、2学期の指導計画を見直し、「英語コミュニケーションI」で「思考・判断・表現」につながる、書く活動を強化した。

単元の最初と最後に、同一のループリックによる生徒の自己評価を実施。その結果から生徒が苦手とする箇所を把握し、指導改善の材料としている。また、生徒が単元を通してできたことと課題を把握できるよう、振り返りの自由記述欄を設けたところ、多くの生徒が、今後の学習で気をつけるべき点を書いた。ただ、「文法の大事さを痛感した」といった記述にとどまる生徒も一定数いた。

「成長しているか、より深い学びになっているかを記述から読み取ることは難しく、生徒に自身の変容をどう言語化させるか、試行錯誤を続けていきます」(上村先生)

●展望

教科や学年を超え、学習評価の知見を語り合う

全校を挙げて観点別評価に取り組む同校は、2022年12月、「新学習指導要領における評価の場面の工夫」をテーマとした公開研究授業を行い、各教科の実践を共有した(図)。当日は、3学年「国語基礎演習」「化学」、2学年「スポーツII」、1学年「数学A」「英語コミュニケーションI」の授業を公開。事後研究では、評価方法

だけでなく、課題の作成を通じた教師の指導力の向上にもつながっている。化学担当の教育情報部主任の西村由先生は、次のように語る。「『アフター課題』に意欲的に取り組む生徒を見て、生徒に課題を選ぶ理由を考えさせることで、学習意欲が高まるという仕かけに手応えを感じています。生徒の関心やニーズも把握できるので、新しい課題を考えたり、問いの難易度を検討したりする際の情報源にもなり、指導改善に役立っています」

の工夫を共有しながら、評価の結果をどう指導改善・学習改善に生かすのかを議論した。教務主任の梅村嘉雄先生は、次のように語る。「新学習指導要領で求められている評価観が浸透しきっていないため、教師の関心は評価方法に向きがちです。現在はそのノウハウを蓄積する段階ですが、目標と評価結果を照らし合わせて指導を検証し、改善する『指導と評価の一体化』の趣旨を外してはいけません。公開研究授業は、その趣旨を確認しながら、学年や教科を超えて実践を共有する場とし、普段から情報交換ができるようになることを目指して行いました」

主幹教諭の小野塚慎一郎先生は、教科学習で培った思考力や判断力等を、ほかの教育活動でも活用できる汎用的な資質・能力に高めたいと語る。「マスターループリックを活用して、各教科が様々な面から生徒を刺激するとともに、目標に準拠した授業ができていくかを評価することが、汎用的な資質・能力の育成につながると考えています」

*2 ジグソーパズルを解くように、協力して全体像を浮かび上がらせる協調学習法の1つ。ある課題について、複数の視点で書かれた資料を読む「エキスパート活動」、そこで得た知識を交換し、考えを深めていく「ジグソー活動」、全体でグループの意見を交換する「クロストーク活動」の3つの活動から成る。